

5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5

(子工スト將軍を偲ぶ)
牛島満將軍追悼記

防衛研究所戦史室



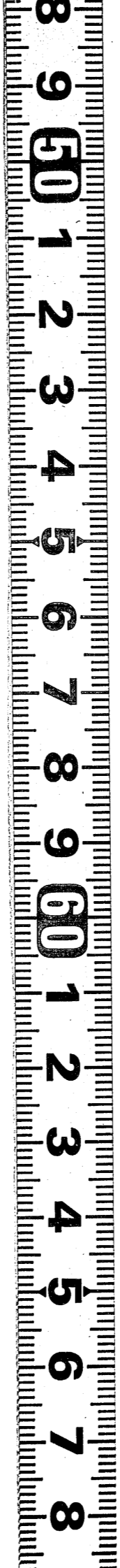


チエスト將軍を偲ぶ

牛島滿追悼記

36. 7. -5

戰史室



牛島さんを

憶う

安 田 尚 義



第二次大戦は、われわれにとつて余りにも悲惨な体験であった。眼をそむけたい程の生々しい追憶が限らない。しかし、牛島將軍については、このような現実を越えて、常にさわやかな親愛を感じずにはをられない。將軍自決の日を偲びつゝ本冊子を世におくる所以もこれに尽きる。

今日の時点に立つて將軍の感懐を理解する事はだんだん難しくなってきたが、本冊子により武將として人間としてのその一端でも追想していたゞければ幸である。

目次

表紙	陸軍大将 牛島 満	3
牛島さんを憶う	安田 尚義	4
満少年のこと	平田 藤彦	6
同期生として	遠矢 良知	8
將軍と木劍	福元宗之助	13
山のような後姿	救仁郷 靖	15
一泡吹かす可候		16
チエスト部隊龍通る	平岡 力	20
〔沖繩実戦記〕		
牛島司令官の最期	萩之内 清	25
米軍の見た		
牛島將軍の最期	宮崎 周一	裏
沖繩戦の意義	田畑与三郎	裏
逸話		裏
〃		14
〃		19
〃		24

初めて中等学校に配属將校が置かれることになつて、どんな人物が見えるかと好奇の眼を持つて待つていた。当時少佐であつた牛島さんが赴任されたのであつた。

生徒は牛島さんが天保鏡組であるのにいさゝか参つたらしい。一中の生徒は、いつたいに氣位が高く、批評的に教師を迎える傾きがあるのであつたが、陸大出の將校を迎えた事は、彼等を満足せしめたらしかつた。その上に一中から幼年学校に入られた所謂先輩であることは又親しみを感ぜしめしたのであつた。

牛島さんにとつては中学のハナたらしを取扱ふことは面倒臭い事でもあつたろうが、よく面倒を見られたその仕事は下士の兵卒を訓練するようなことで、馬上豊かに指揮刀をふるえば足りる地位にある人が、時には上等兵のするような事までしなければならぬのを見て、私達は氣の毒に思つたほどであつた。

しかし牛島さんはいつもニコニコして、面倒くさそうな顔色をされたこともなかつた。陸軍として、配属將校は劃期的な制度だけに、最初の人選については特に注意が払われ、鹿兒島は土地柄だけに、その代表的一中には人材を以てし、牛島さんが派遣されることになつたと思ふが、それだけ牛島さんも責任を自覚されよく努められたのであろう。

一中校内の相撲大会が開かれた時、牛島さんは廻し

をしめて生徒を相手に土俵に上られた。体格もよく力もあつて生徒の猛者連も歯が立たなかつた。

配属将校生活は一面牛島さんにとつては離伏時代であつたが、少しも不平らしい顔をせず、心の余裕を見せていた。その一つの現れとしては空気銃を持つて雀撃ちを楽しんでをられた。ソツと足音をしのばせて、実の黄色く梢に残っているセンダンの木陰に寄つてゆかれる姿が今も胸に残っている。

一中の教練教師に坂本宇吉といつて、大尉で日露戦争後退役した人がいた。一寸風変わりな人物で容易に人を褒めない人だつたが、牛島さんだけは心から敬服して「立派な将来の軍司令官だ」といつていた。その言葉の通り立派な軍司令官になられたのだから、宇吉氏に一眼見せたかつた気がする。

私たち一中の職員であつたものは、牛島さんと同僚であつたほまれを生涯忘れることは出来ないのである。そのみならず私は個人として忘れることの出来ないことが一二ある。

その一つは私の長男が一中の一年生に入つて間もない事、朝礼の時牛島さんが台上から生徒一同を見渡された時、その長男が隣りの生徒と何か話つていたらしい。牛島さんは即座に

「安田、何をしているか」と叱責された。私は父として恐縮したのであつたが

、早くも私の子供の顔を見知つて頂いている親切さに感謝せずにはをれなかつた。

長男もこれで魂が入つたか、勉強して今日では何うやら一人前の人間になつて東京で働いている。私共親子はこうして一瞬牛島さんを忘れる事は出来ないのである。

私は牛島さんが昇進されて将官になられても、お会いする機会があると隔てもなく一中時代の親しみを以て話して頂いた。最後にお目にかゝつたのは、中将になられて士官学校長をしてをられた時で、東京の三州クラブで四月十九日に一中創立記念日の同窓会が開かれた折であつた。私は一中職員というので正面に牛島さんと並ばせられた。牛島さんはその地位がいかに昇つても、威張るような人ではなく、昔の少佐時代と交らずに接して下さつたのである。

この好將軍が沖繩で玉砕され、武士らしく深く切腹して果てられたことは私たちを感泣せしめたが、その遺徳は時代と共に輝きを増す事であらう。いかなる場合にも莞爾たるその面影は、いつまでも世に生きてゆかれることであらう。(元鹿兒島一中教諭)

逸話 (一)

△或る日、一中の腕白共を率いて野外演習を指導されていた。牛島先生と坂本宇吉先生が紅白に別れて、牛島先生の方は坂本先生率いる山間に陣地を敷いている組に相對していた。牛島先生曰く。あの山の敵をこんどは頂上の右、あの点まで移動させるからね。腕白共はいくら天保銭でもソンの事は出来んと思ひ、先生ワヤク云いやんな。ぢやつたら宇吉さあ」と話合つて来やつたると不服を申立てた。牛島先生は、そいぢや反對に頂上の左、あの点まで動かして見すつがと云われて、生徒達の一部を適当に移動させた。啞然として見つめている悪童連の目前で、宇吉さあの部隊は、牛島先生の指向された点

まで、正確に移動してしまつた。

△牛島先生の魚獲りと鉄砲打ちは有名だつた。余程の楽しみにしておられたらしい。その日曜日には遊びに来た悪童の二、三人を連れて愛用の空気銃をもつて出かけられた。余り大した戦果もあがらず、遂に新照院の奥深くまで行つて、やつとある門構えの家の中に雀群を発見した。牛島先生は慎重に塀の外から庭木の雀をねらつて引き金をひかれた。一せいに飛び立つ雀と共に婆様が出てきて、まこと魂の入らぬもんじや年なものの一喝されてほうぼうの態で引上げられた。

チエースト行方

牛島

満

満少年のこと

平田藤彦

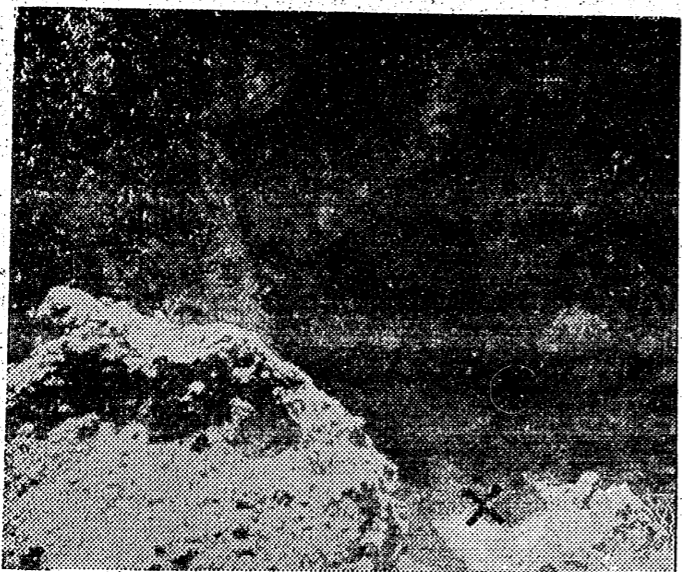
牛島満さんとは同方限の学舎で育ち、私より少し後輩である。兄さんの省三君とは同年輩の遊び仲間であつた。舎の習慣では少しでも年令が違つて後輩扱いで遊び相手にもせず、たまの日曜日など田圃に魚獲りに出掛ける時などタンゴをさげさせられて後から尾いてくるといふ位のことであつた。

陸士を出られた時は恩賜組であつたが、幼少時代から秀才型であつたかと云ふと必ずしもそうでなかつたと思はれる。牛島兄弟が勉強時代に入つてから邸内に離れ家の勉強室が設けられたが、実はこゝが餓鬼大將どもの集まり場所であつたし、又偉大なる故人兄弟のよき温床でもあつた。夜晩くまで此の小屋で遊んでいて皆が眠つた後兄弟で深更まで勉強されたい。その証拠には翌日遊びに行つてみると、洋燈の石油が殆んど尽きていた。つまり幼少時代から「ヌスト勉強」をよくしてをられて学業の成績もよかつたわけである。この流儀で陸士卒業の時もローソクを便所に持つ

て行つて「ヌスト勉強」をされた結果があの結果になつたのではないか。陸大卒業の時は「近頃は酒を飲み習ひましたから勉強が足らず駄目でした」と阿々大笑された事を記憶している。

大將は三人兄弟であつた。長男鉄之助氏は早く死去され、次兄省三氏は茨城県知事や朝鮮総督府内務局長を歴任、京春鉄道社長時代に死去された。兄弟の仲は非常に睦まじく、性格もよく似てをられて、智謀備はつていて頭はす所なく、外は茫洋として内は細密、つまり「外ドンドンの内メグリ」であると云ふのが吾々仲間の牛島兄弟に対する定評であつた。

故岩山直養氏が一中の配属将校として赴任され拙宅に來られて曰く「満さんのおまんさん達と魚取いばかしてをられたちうが、私が今度赴任してみても配属将校の仕事のゆきと云つては感心しませんでした。お蔭さあで、私は菜なごつごわす」



摩文仁洞窟 牛島將軍の自決場所 (×印)



未亡人 牛島 君子
(沖繩戦没追悼会にて)

旅团长になつて鹿兒島に販られてからよく拙宅にも遊びにこられた。後年私がある事で少しからかい過ぎたと思うが、「私は陸軍の教育家ごわんど。陸軍広しと雖も、戸山学校、予科士官学校、士官学校の三つの校長を勤めた者は外にやごわはんど」と云はれた。この言葉は今から考へてみると決して冗談半分には聞き流す事の出来ない文句であると思はれる。全く満さんの高邁なる人格と精練された武士道精神が将来の国軍幹部を熏陶するに如何に必要且最適であつたという事が思はせられる。(故人、集成学舎理事)

同期生として

遠矢良知

私が陸士第二十期生として明治三十九年入校した時の同期生は二百八十余名で、その中三州出身者は二十名であった。

待ち焦れる日曜日には、三省舎に向いて、幼年学校生徒達と一緒に菓子など腹一杯に詰込んで楽しい一日を過ごすのが例であった。

牛島満は、鹿兒島一中では私より一年後輩であったが士官学校で一緒になったのである。在校一年有半の間最も親密な間柄であった。

古い手紙類を整理していた処、はからずも私が陸士卒業式の模様を郷里の老父に知らせてやつた手紙を見出した。若い日の拙い文であるが、恩賜の銀時計を戴く同君の事があるので抄出する。

(前略)五月二十七日、懃々今日は私共の晴れの卒

業式に有之候。晴天であつてくれる様に祈つた甲斐もなく遂に降り出し申候。

将来軍隊の禎幹としての學術科を修得した一年有半の歳月は永い様で誠に短いものに感じ申候。今日茲に天皇陛下の御臨席の御前に於て卒業証書を授与される。千載一遇の光榮に浴する事は真に男兒の本懐に過ぎたるもの無之、又遠矢家一門の名譽を思ふ時、血湧き肉躍る感じが致申候。十時三十五分天皇陛下は降雨もいとわせられず御著校遊ばされ「君ヶ代」の奏樂は市ヶ谷台に響き渡り申候。直ちに学校中庭にて卒業生徒の閱兵式が行はれ、次に各兵科の分列式は勇壯なる軍樂隊の行進譜に歩調を合せて、歩兵二中隊、工兵一小隊、清国學生隊一小隊が歩武堂々と進み行き、之に続いて乗馬隊の砲兵一中隊、

重砲兵一小隊、騎兵一小隊は更に急調子で快絶極る行進曲に砲車の軋る響や、馬蹄の音と相和して、実に壯絶なるものにて御座候。分列式後……(略)各宮殿下以下多数の將星列席の式場に、天皇陛下御臨場あらせられ、私共二百八十名の卒業証書が授与せられ、次に優等生に対して恩賜の銀時計を御下賜相成申候。此の間も軍樂隊の奏する壯重なる行進曲に伴ひ、一人宛御前に進み出で侍従武官から手渡され申候。

歩兵生徒の二番目は、近衛歩兵第四聯隊の士官候補生牛島満君にて候。同君は高見馬場方限の出身にて私とは若い頃からの顔馴染の間柄にて学校でも最も親しき友達に御座候。壯重なる行進曲に歩調を合せて一步一步進んで行かれる時、私は恰も自分の事の様嬉しくたまらず、余りの感激に胸が詰る様に、私の血汐は一時に湧き上り涙が頬を伝はつて流れ申候(後略)

牛島満君は薩藩士牛島実満氏三男として東京で呱呱の声をあげたのであるが、父君は維新直後から東京に住し、陸軍中尉として近衛聯隊に勤務してをられた。然るに父君は満君出生六ヶ月前急に逝去されたのである。そこで鉄之助七才、省三五才、清子三才と生後数ヶ月を出ない満君を抱かれて、母君は郷里鹿兒島に販られた。織手四人の子女を養育された苦勞は並大抵の

事ではなかつた筈である。市立山下尋常小学校一年生を終る時、その成績優秀の故を以て学友二、三人と共に特に三年生に編入された。そして鹿兒島一中に進み翌年には熊本陸軍幼年学校に入學したわけである。甲突川の畔に育つた故かエビ獲りや鮎釣りが好きであった。配属將校時代は空氣銃も備えて雀打ちを楽しんでいた。角力も強かつたが鉄棒が非常に得意であつた。持ち前の持久力で軍人になつてからも逆車輪や逆立ちなど上手にやつていた。剣道も堂に入つたもの。刀剣を愛し如何に多忙の時でも木剣の素振りをおぼろなかつた。

一面に於て酒を飲むと三、四杯で耳まで真赤になる上機嫌になると端唄を歌い、裸踊りもやる磊落さ。又頗る大食家で人を驚かす事が屢々であつた。

苦手は講演を頼まれる事であつた。性来無口で話し下手であつたから、例へば口角泡を飛ばして論議していても牛島満君はニヤニヤ笑うて聞いているばかりであつた。緻密なものを職しながら茫洋たるものがあり情誼尽きせぬ風格が滲み出ているので、何時の間にか衆望集り將の將たる者と誰からも仰がれ親しまれたものであると思ふ(故人、一中陸士同窓)

將軍と木劍



福元宗之助

將軍と私は必ず鹿兒島弁で話していた。私が何の遠慮もなくすら話す事が出来るように心遣いされた為であろう。

昭和十年県立伊集院中学の講堂に掲げる為に荒木大將の御揮毫をお世話下された牛島満大佐(当時)に對し、お礼として私の木劍が選ばれた。中学校から依頼を受けた私は精魂こめて二振りを製作し早速送付したところ、間もなく陸軍省から八振りの注文があつた。これが將軍と私とのいどぐちになつた。

昭和十二年將軍は鹿兒島第三十六旅團長として着任された。その年の五月十四日朝の事。私は前夜エビ獲りに行き寝巻のままそれを焼いていたら馬蹄の音も高く三人の軍人さんが近づいて来た。思わず戸口に出

てこれを迎えた私に「木劍を作りやつ所やこゝな」と聞かれた。「私です」と答えると「あたや牛島ごわんさあ」と云われ馬から飛降りて副官らしい方と二人家の中へはいつてこられた。もう一人は副官の江口中佐であつた。

「閣下、私はこんな家にて貧乏しておんさお」と云うと、

「貧乏はしてん、よか木劍が出来るからよか」と云はれた。

エビを御覧になつて、

「こんエビを伺いでこげん多く取りやつたもんな」と聞かれる。

「うんまかごたいが分けてたもさんか」

「えゝあげもんが」

副官と二人にとの事で六串づゝ包んで差上げると、お金を二円下さる。辞退したが「取つとけ」とここにこしてをられるので戴いた。

此の日も新しい註文を受けた。その後出来上つた木劍を持つて旅団司令部に行くの大変喜ばれて「聯隊にも行け」とわざわざ電話して下さつた。聯隊長は神田大佐であつた。

支那事變が勃発して出陣される時、私は伊集院駅で見送つた。釜山からお便りがあつて、兄の省三に木劍を送るようにとの事。その後も戦塵にまみれ、忙しい身でありながら吾々如きに度々お便りをいたされた。

昭和十四年一月十八日、出水駅より「ゴゴ七シキチツークワウシジマ」の電報が届いた。近所の小田三雄先生(小学校)にも連絡し、日の丸の旗を持つて駅まで行つたがホームには誰もいない。やがて到着少し前になつたら鹿兒島発上り列車が到着し、其の中から將軍の知己らしい人が数人降りて来た。ホームに列車がすべり込むと

「会をこたつた、福元さん」

閣下は窓から顔を出されて大声で呼びかけられた。

一月二十日には母校山下小学校を訪れ小学生に講演あちこち遺族の申問。士官候補生の教練を見、訓辭をなし、更に陸軍病院の慰問。午后三時からは西別院で

遺族を招待して追悼法要を営まれたので、私は高等小

学校一年の息子をつれて西別院に御挨拶に行つた。

「此ん子供は？」

「息子です」

將軍と副官と私達四人連れで野菜町の入口の角で別を告げました。將軍はわざわざ引きかえして宗雄の頭をなでながら

「はめつけねえ」と云つて下さつた。

其の後、將軍は満洲虎林へ第十一師團長として行かれ早速木劍の註文を下さつた。早速荷作りして駅に持つて行つたら虎林は鉄道連絡がないので受付けない。此の旨を將軍へ連絡すると「連絡の取れる駅まで送つてくれたらそれから先は届く」との御通知を貰い、それを持つて駅に行くとやつと受付けてくれた。

「モッケンウケトルオレイモウスウシジマ」という電報がやがて届けられた。

昭和十八年春、士官学校長時代、四谷三光町の牛島邸に参り、頭山満先生の米壽記念品入りに箱書きを頼んだ。

「よゝ書いてくるわい」

とすぐ書いて下さつたが、

「こら、おかしな字が書けたで又かんなで削つただいかほかんし」書いてもらえ」と申されたが、其の儘であるのでよい記念である。

私は毎年春と秋には上京していた。閣下は何時行つてもニコニコ顔でやさしく迎えて下さった。

「鹿児島の方はどうか？」

「今食糧増産で開墾です。大分山を伐つて畑にしてをります。」

「後には木を植えるか。木を植えてをかんといかんかね」……

或日、焼芋を少し持参した。

「ほう。わやこんから諸はいけんしたとよ」

「うちから焼いて来ました」

大笑いしながら喰べられた。

閣下がひげをそつてをられた。

「閣下は誰にでも学校でそらせやればよかてな」

「ひげはわがれそらんやわや」……

昭和十八年五月二十日。將軍は「五月二十三日皇道義会大会に招待されているが、おや行事で出席出来ん

から、わい行かんか、おいが名刺を書てくるつで。此ん大会にや剣道総裁梨本宮殿下もお出でになるから……

という事で「木劍師福元宗之助氏上京に付五月二十三日大会に入場許可相成度願上候。石井三郎閣下。陸軍中将牛島満印」と書いて下さり、貴重な機会を得させて貰つた。

上京中私はこのようにして半分位は將軍邸に泊つていた。四谷に泊めていたといつていた時、

「おれ九州の聯隊を見けいけと上んしが云ふので、鹿児島づい一週間行つてくら」と云はれるので、私は

「全国蘇峰大会（徳富蘇峰）まで居なくてなりませんで、鹿児島の白男川先生に、福元が木劍材を買けきた時は、何処ん製材所でも割いてくれるよう話をし下さい」と頼んだ。

チエースト行々

牛島 満

「おやだまつ鹿児島には行つて、白男川どんたちとも会わんない」

「だまつ行つても来やんが」

「ごわつた時や云わい」

日ならずして——私は国技館に相撲見に行つての帰り、大雨にずぶ濡れで牛島邸に行くと將軍が帰つてをられた。

「おや、今もどつて来たい。わいも早よ上れ」

「私はぞつぷい濡れもした」

「ぬれちよつたい、かもかい上れ」

と云われるので上る。

「さぶとんのしけ」

「ぬれをつでさぶとんなよかんさ」

丁度閣下はすき焼をしてをられた。

「わいも食え」……

「白男川どんのごわつたよ」

「見やんそらきやつつろが」

「わいが事頼ん置だで、明日おいが名刺に書いてやるから、そよ白男川どんに持つて行け」という事だつた。

掃蕩して白男川先生にその名刺を見せたら「おまんさあな」と云われて証明書を書いて下さり何処の製材所も便宜をはかつてくれるようになった。

昭和十九年六月上京した時

「閣下が漢口で申されたあの言葉を書いて下さい」「明日書こわい。おいも忙しゆし、明日はさしかぶい休んぢやらい」

三日の朝中野に行く途中牛島邸に一寸立ち寄りした所で「一時頃来んか」と云われる。中野の用事をすませて来ると横書を五枚書いてあつた。

「はら、閣下は私が云うとは書いて下さらなかつたが」

「あや字がなかでわや」

「字がなかなら片仮名で縦せえ書いて下さればよかつたどん」

「せいなら又書かんならわや。わやこまごつ云うでならん。レイ子（令嬢）又墨をすれ。ちかつともよか。多うすれや、こん、おんじよが何枚も書かすつで」

「いや一枚で結構ごわんど。今度ずいでもう書つてもはんで」

相変らずのニコニコ顔で、奥様も見てをられる中で

「チエースト行け」と書かれ、

「こら、おいが名前を書くとこやなかとね。こんがよから」と申された。奥様が尋常一年生の書いた字のようですと云われたので

「字の上手下手は申しません。人格者の字が欲しいのです。判も押してたもんせ」

「判もたんない。こいが、おいが審判ぢやらい」と説明されて花押をされた。

「何時かおいがおまいがえ来た時、貰ったえびはうまかつた。今もあげんえびが取るつか」

「近頃は、ももんごた取れもはんど」

「も、おいどんが取いたえたとよ」……

其の夜六月三日私は東京を発つて帰鹿したが、此の時が閣下との永久の別れとなつた。此の年八月十日に沖繩に向け出発された由である。

昭和二十年の賀状と木剣の註文書を沖繩から戴いた早速礼状を差上げたがお手元に届いた事か。木剣も荷造して県の船舶部に頼んでおいたが、船が出ず遂に送る事が出来なかつた。

閣下が戦死されて間もない頃の事。革の洋服を着けられ馬上ゆたかに牛島將軍が拙宅の前に立たれた家中を見ていられる。夢であつた。が私は小田先生に相談してお写真を持ち二人ついで妙円寺に詣り英霊を弔つた。ある時は美しいお姿であられる。此度は山口毅氏（元陸軍中佐）と一緒に妙円寺に行つた。

閣下は将来益々有名になられ、大をなす方だと存じかねて新聞記事や戴いた手紙六十通位保存してきましが、赫々たる武勲と秀れた作戦の妙は、米軍事専門家も驚嘆するところで、リーダーズダイジェストの記事など見て、今更のように感激させられる。

大楠公の七生報告の精神は先生の辞世の中にこそはつきり認む事が出来ると思う、
矢弾尽き天地染めて散るとても、
魂かえり魂かえりつゝ皇國まもらむ、
あの温顔で斯くも日本の将来をお護り下さつて居る。永遠に日本の空を駆け廻つて私共を見守つて下さつて居る。……私は勇気百倍、如何なる苦勞も苦勞と思われないのである。

（木剣師）



山のような後姿



■救仁郷 靖

たとえば――

將軍が士官学校長の時、生徒舎から失火して幹部室四ヶ中隊分を焼いてしまつた事がある。その当時私は学生隊の週番士官として勤務中であつたが、出火と同時に週番総司令より牛島校長宅に報告し直に自動車を差向ける旨申上げたところ、

「私が行つても別に火は消えないだらう。まあ明朝平常通りでよろしかろう」という返事。幸い大火にならず鎮火したが、当時はやかまし屋東条陸相の時代だから、翌朝皆門に乗馬出勤の校長を出迎えた勤務將校達は責任感に全く悲壯なものがあつた。ところが校長は例の「ユニコ」顔で報告やら詫びやらを聞き「やあ！ 昨晩は御苦勞」と一言。そのまゝ司令の案内で火事場まで馬を進め軽く余燼くすぶる現場を一へつ「うん、

牛島將軍に接し薫陶を受けたというのは、私が鹿兒

島一中入学早々牛島先生が配属將校をしてをられた時陸士在学中当時陸軍省高級副官の要職にあつた先生から私宅や三省舎等でいろいろお話など承つた頃、それから先生が陸士校長在任中生徒区隊長として直接その統率下に勤務した二ヶ年――これだけの決して長い期間とは云はれない、しかも地位的にも年令的にも相当隔りがある事で偉大な全貌はよく窺い知る処ではないし、何かほのぼのとした限りない懐しさが強く脳裏に刻み込まれている。

私共若輩の者の目にも、真にさつくばらんで取り澄したり偉ぶつたり作爲の全くない人、何時もユニニコして怒り顔は決して見せず、そのくせ巧まざる威厳があつて自ら相手を心服させるものがあつた。

まあ怪我がなくてよかつたな。しかしよく奇蹟に焼けたもんだねハッハハ……」と校長室に引返された。私達は呆然としてその後姿を仰いだ。まるで山の様な泰然たる姿であつた。

やはりその頃のこと、ある日同僚二、三人と学校から小田急の駅の方に歩いて行くと、黄色い将官旗をつけた校長の車がす——つと後から追越したと思つと、グツとブレーキをかけて停り、扉を半分開けて将軍が手招きしてをられる。

「おい、何処へ行く」

「今から東京に遊びに参ります」

「そんなら俺も東京へ販るところだから、この車に乗れよ」

一同びつくりしたが外ならぬ牛島校長の云はれる事だからと喜んで同乗させて貰つた。小田急の駅にさしかると、

「私達はこゝで失礼させて頂きます」

「まあ待てよ。君等の行く所まで送つてやるから一緒に来い」と云いながらいたづらつ子のよふな笑顔で目を細めてをられる。こちらは一ぱい飲みにゆこうと思つている所だから強つて辞退に及ぶと、

「そんなら可哀想だから此処で勘弁してやる」と嬉しそうに敬礼を受けて走り去つてゆかれた。

たゞこれだけの事であるが、私達は思はず歎息を洩らした。

——全くよい親爺だな——

(陸上自衛隊幹部学校)

逸話(二)

▲日支事変の頃野田中尉の百人斬が連日のように新聞を賑はしていた事がある。野田中尉は鹿児島一中以来の教え子である。牛島將軍はその記事を手にして部下のM氏を呼ばれた。M氏と野田氏とは一中陸士と同窓であつた。將軍は

「この記事が事実とは思えんが、よしんば噂にせよこんな事で有頂天にならぬように、野田に手紙を書け。」何時にない厳しい顔であつたといふ。

▲戦後横浜で薄幸な少年の為にボーイズホームを営んでをられる竹下福寿氏は生来志望でなかつた。陸士に進んだのは、一中時代牛島先生にすゝめられてひよつとその氣になつてしまつたからといふ。

一泡吹かす可候

沖繩の牛島將軍から

最後の書翰

沖繩方面に來寇した敵に決死敢闘三ヶ月、大出血を強要して、畏くも感状を授与せられたが遂に去る二十日全軍に最後の攻撃を実施した沖繩方面最高指揮官は牛島滿中將であることが明らかにされた。牛島滿中將の名を聞いてあつと感じた人は少くなかつたであろう。牛島中將は鹿児島市高見馬場の出身、鉄之助省三の二兄を持ち一中二年から幼年学校へ進み陸士陸大と順調な道を歩いた。

幼年時代から聡明で腕白ものという程ではなかつた。高見馬場の舎(後に加治屋町の舎と合併)に通い、白男川讓介氏や岩切市長などは少年時代からの親友であつた。大正の末年各学校に現役將校配属制度が実施された時、当時少佐の滿氏は母校一中に初代配属將校として着任俊英機敏、行くとして可ならざるはなく訓育振りは既にして大將軍の器であることを思はせた

又一中の校風も大いに改まつた。その後陸軍省高級副官として中央で活躍した事もあるが吾々に印象深いのは郷土部隊を率い、部隊長として活躍されたことである。

南京攻略戦では「チエスト征け」を命令として三州健児の眞価を遺憾なく發揮された。帰還後は陸軍士官学校長に補せられ後進の育成に尽す、中將の薫陶を受けた若人たちが今中堅將校として全戦線に善謀勇戦しつゝある。中將は沈着、寡言茫として捉へどころのない性格のうち用意誠に周到、部下を愛し剣道は達人といふ非の打ちどころのない典型的な將官であり、陸軍人であつた。

敵の上陸数日前の岩切市長宛の書翰は中將最後のものと思はれるが、

当方も幾度か敵上陸を覚悟し候も比島硫黄島方面に向ひ候ため戦備はその度毎に強化し地形戦力準備など目下最も戦力強化せられをると存じ敵の上陸は必ず撃退し一泡吹かす可候。

と満々たる自信が披瀝してあつた……(略)

▲註▼鹿児島市からは返事に添えて桜島大根や密柑を送つたが果して落手されたりうか……(勝目清氏談)

チエスト部隊罷り通る



郷土部隊を率いて
大陸を征く
チエスト

平岡力

昭和十二年八月、第六師団は北京南側地区に集結した。九月中旬行動開始予定で準備中、敵が北京西方山地に進出し、師団背後に危険を感ずるに至った。牛島部隊（旅団）は主力を以てこれが撃退を命ぜられた。非常に峻峻な地帯で作戦も苦心を要し、当時の新聞には千軍台の戦斗として報ぜられた。これが緒戦であった。

九月十八日（？）愈々旅団主力は前進を開始し、永定河の敵前渡河戦から猛烈な迫撃戦に移った。保定は北支に於ける支那軍の本防禦線で正定城を拠点に蒋介石の決意も相当なもので、軍でも非常に重大視していた。その頃牛島旅団長は師団が南下始めた事に呼応し急いで千軍台に敵を叩きつけて師団主力を迫及した。長雨の後の道路は、膝を没するどころか股を没し、砲

車などは前車と後車と離脱して馬六頭で曳いた。それで一日僅か二里位の前進しか出来なかつた。

師団司令部が二十日夜西定北方一日行程の点に宿泊中、夜半の二時か三時頃、牛島將軍が副官一人を伴つて到着された。早速師団長（谷壽夫中将）に対し

「只今到着しました。追及が遅れて御心配をかけた。愈々保定攻撃が迫りましたから詳細の報告は後日にゆづり、先づ任務を頂きます」と挨拶があつた。師団長兼僚の喜びは一方ならず、旅団は右縦隊となり正定西北方地区に前進すべき命令を受けられた。

部隊は私曉頃到着するとの事で、私の室（高級副官）でその状況を聞いてみた。途中、永定河右岸地区で他師団の部隊が敵に引きかゝつて居るのを応援して時間を喰つた為昼夜兼行でやつて来られた事が分つた。

大概の人なら道路の悪かつた事、手柄を樹てた千軍台の戦斗の事などを真先に報告するのが普通であるが師団長に対し先づ任務を要求された所など牛島將軍の性格のあらわれと思はれる。

牛島旅団は西定城西北側、六百〜一軒の線に展開して薄暮時を利用する諸偵察等を行っていた。

軍としては正定攻撃には相当の苦戦を覚悟しなければならず、急に重砲旅団の配属命令が出、夕刻には前田旅団長の率いる重砲一ヶ隊が到着した。しかるに師団攻撃重点たる城の西北角には道路の関係で重砲が利用出来ず、重砲を生かす為には正定城北門附近でなければならぬ。重点変更の止むなきに至つたわけである。

折しも作戦主任参謀は昼から牛島旅団長と共に第一線にあつたが、両者から今に及んでの重点変更は至難の意見具申があつた。この六百米の近接距離では城壁の上から見下され、如何なる名将でも配備変更は至難である。遂に師団長は牛島旅団長を呼び寄せて無理に重点を変更するよう命令された。

午後九時過ぎ、牛島閣下は師団長の処から帰りがけに私の室を訪れた。例のニコニコ顔である。「師団長から叱られたよ平岡君。処罰すつち云はれたよ」

「師団長も、師団長だ。子供みたいな事を云はねども、要は損害を少くして正定を占領すればよいのでせう。まあ前祝いで……」

私は冗談を言い乍ら冷酒と粗末な夕食を出した。「甘いね——」と教盃を傾けられる。

「愚図々々している処罰される」と立上られる。私はヨーカンを四五本無理にポケットに押し込んだ。

「有難う。副官にお土産にしよう。平岡君、元気で働きやい。今度は何処で会えるだろうか……」

闇の中に消えてゆかれた將軍の後姿を拝しながら「神よ守れ」と祈念した。

それから三時間か四時間かしたら、牛島閣下自身で電話で正定城壁占領を報じてきた。師団長も重砲旅団長も驚きに油揚さらわれたかのように、おめでどうの挨拶も忘れられた様子。私は此の状況を見乍ら胸中快哉を叫び、牛島將軍の決意が如何に強かつたかと感服してしまつた。

城内掃討中、私は牛島旅団に使いに行つた。城壁の高さは十間余。全く人間業とは思えない。

「閣下、お目出度うございます。昨夜は痛快でしたもう処罰は受けてもよいでせう。然し、あの城壁をどんなにして登つたのですか」

「ううん。昨夜は有難う。ヨーカンのお蔭じやつたよ。僕の旅団は登れと云えばどんな所でも登るよ」

ニコニコ笑つてをられる將軍の顔には、全く後光の射している様な尊さを感じさせられた。

その後師団は唐沽に集結の命を受け、朝鮮木浦沖で柳川軍の指揮下に入り、杭州湾に上陸する事になった。杭州湾は汐の干満の特に激しい処で満潮だと思つてゐる中に引汐となり、その流れの早いこと——くづくつしてゐると舟は浅瀬に坐つてしまふ。

十一月三日末明濃霧に包まれた杭州湾に敵前上陸を始めたが、牛島三十六旅団は海潮の事情を考慮して師団主力を離れ上海の方に廻つた。

師団主力は直ちに南翔方面に敵を追いつ、蘇州に向い前進。昆山占領後また後返つて金山から南京南側地区に向う事になった。敵の首都攻略が近い。不眠不休最初二昼夜は強行軍を続けたが、疲労が激しいので後には夜半三時から五時迄大休憩する事にした。

補給は続かず、食糧は現地徴発。上陸後支給された軍靴も毎日のクリーク渡河で糸が切れ、衣類は乾燥する暇がない有様。

牛島旅団は此の後から師団主力を追及したのである。すでに沿道には一粒の穀物もなく畑に一本の大根もない苦しい行軍である。然しこの困難を克服した牛島旅団は南京攻略二日前に追いつき、早速左第一線の命を受けたわけである。

十一日閑院宮春仁王が聖旨伝達並に戦況視察の爲お出になつた。その翌朝牛島閣下が殿下に戦況報告の爲司令官に見えた。私の姿を見かけて、

「平岡君、何処へ行きやつとな——」

「いや一寸……」

「野糞じやろ」

「そうです」

「野糞ならね、軍刀と拳銃はしやがぬ処の近く置かんといかんよ。実は昨日僕は軍刀と拳銃を少し離れたところに置いていたら、支那の敗残兵が十一名銃を持つたまゝ来るではないか。あいた、ちよいしもたと思つてそのまゝズボンを左手で引上げながら軍刀の所まで行つて、軍刀を手にして手真似で「来々」とやつたら「助けてくれ」と云う様な身振りだったので、手真似で銃を地に置けと命じたら神妙に銃を捨てた。ようやくズボンをしめて司令部に連れて行つたよ。ボンとやられたら、そいぎいじやつたが……」

後は大笑いであつた。
南京占領後、無湖に前進中、牛島旅団司令部に苦力が沢山荷物をかついで附いてゆく。この苦力はどうしたのですかと聞けば「野糞の時の捕りよだよ」という事で、また大笑いしてしまつた。捕りよは可愛がつても危険を感じて何時の間にか逃げるらしいが、此の捕りよ達は長い間將軍を命の親として神妙に仕えたとい

う。

南京攻略戦は、上海派遣軍——東門（中山門）柳川軍——南門（黄華門）方面から一番乗りを競争した。

十二日夜半中山門一番乗りの情報伝わり、師団はがっかりしてしたが、後で上海派遣軍方面は城門に手をかけたけれども殆んど全滅し、十三日に及んでも占領してない事が判明。再び郷土師団も力瘤を入れて攻撃を強行した。牛島旅団は歩四五を南京西方から敵の逃げ口である浦口（南京北側の港）に迂回せしめ、旅団長は歩二三を率いて師団の左第一線を進撃。日没頃城壁すぐ南方にあるクリークに工兵隊が架橋。これを渡つて午後六時頃遂に城壁に到達、引続き夜間に城壁全部を占領して市内掃蕩を遂げ、漸く南京一番乗りの譽を得たわけである。

昭和十三年七月下旬、第六師団は揚子江左岸から武漢攻略のため前進を開始。途中中田家鎮等の大苦戦を続けて急進し、しかもこゝでも一番乗りの手柄を樹てた。牛島將軍と共に渾然一体となつた郷土部隊チエヌト行けの勇戦は、常に偉功をあげ続けたわけである。將軍の胸には功二級金鵄勲章が輝いた。

（護国神社奉賛会事務局長）

逸話(三)

勝ち抜きて城に入る日は

秋晴る

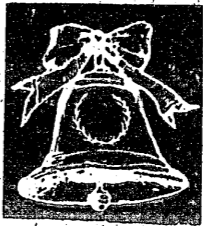
牛島満

▼首都南京城一番乗りの牛島部隊には松井石根最高司令官から破格の感状を授けられた。將軍は此の戦斗で作戦命令の末尾に、只一言チエヌト行けとつけ加えられたと云う。郷土部隊將兵の熾んな志氣が想像される事である。
▼漢口附近の小邑に棲い美人の名妓があらわれた武漢三鎮攻略後の小康を保つていた頃。既に牛島將軍は東京に転任後であつたが、満洲の北辺から遙々後を慕つてきたという噂であつた。
▼歴史的な二、二六事件後歩兵第一聯隊長として肅軍第一線の責にあつた將軍が、その後同聯隊を率いて満洲駐在時代の因縁とか。

牛島軍司令官の最期

沖繩戦実記

■ 萩之、内 清



昭和十九年十月十日突然米空軍の初空襲を受けた那覇市は、其の後数次の波状攻撃により殆んど焼き尽くされていった。空襲は日増しに激しくなるばかりである。わが軍は牛島閣下を司令官とする第三十二軍で、第九(武部隊)第二十四(石部隊)第六十二(山部隊)の各師団、和田中将の率いる砲兵司令部が満洲と支那から移駐して志気溢れていた。海軍側は太田少将以下約一万に近い部隊が増強され、各部隊共夜を徹して陣地構築をしていた。

その頃マリアナ群島を主陣地とし、沖縄本島を予備陣地と大本営では考えていたらしかったが、既に十一月にはマリアナ全線が突破され次の主戦場は比島か沖縄かと云はれていた。いよいよ二、三日で昭和二十年の正月だという頃、突如精銳第九師団が転出する事に

なつた。行先は比島らしかったが結果は台湾で止まつてしまった。その時独立迫撃砲も一ヶ大隊これに従つて行つた。第九師団の補充には第五十八師団が姫路に集結しているとの話であつたが、すぐ大本営から取消されたとの事で、いよいよ大本営では沖縄を前線陣地となし本土決戦を策しているのだという事を連絡將校から聞いた。

二十年三月頃から敵の大爆撃が続いた。吾々の嶺は岩盤十米位を掘さくしたもので爆撃には平気であつたが直撃弾にはさすがにこたえた。鉄かぶとの上からハシマーで叩かれたような感じである。第九師団の抽出で折角完成した防禦陣地は配備変更である。爆撃下の作業であるから並大抵のことではない。第二十四師団は中頭郡(本島中部)第六十二師団は島尻郡(本島南

部)軍司令部は依然元の通りで、海軍は小蔵飛行場が司令部であつた。

三月下旬になると米艦は遙か水平線に見え、夜明けと共に姿をあらわし夕暮になると消えてゆくのが毎日の如くだが、その都度艦船は増加するばかりである。後には戦艦、航空母艦まで遊弋している。

夜に入つてわが特攻隊の襲撃があると、花火線香を一握り一時に火をつけたような曳光弾の弾網だ。無数の照空燈に捉われた我特攻機が、火網の中で反覆急降下する姿がはつきり見える。この二、三十分の間だけは敵の艦砲射撃がないので、隙からみんな出て大自然の空気を一ぱい吸いながら見物している。敵艦の轟沈らしき火柱が上れば期せずして万歳が起る。あの山からも岩窟からも。

▼ 血と砂と叫喚

敵の上陸箇所は果して何処か？ 軍は嘉手納か湊川の二正面を予想していたらしい。

敵の大小艦船二、三百隻が本島を包囲している。何処を見ても敵ばかり。月末頃には盛んに湊川正面附近に上陸しそうな気配を示す(陽動作戦であつた)。

四月一日嘉手納海岸線附近に敵艦の大猛射が始まつた。忽ち地肌が変つてゆく。二、三百年も経たであらう松樹が飛散する。

大上陸が始まつた。水陸両用戦車が白浪を蹴立

て、バク進してくる。後から後からと限りもなく。艦砲の猛射は密度を増し、空爆は空を覆うて激しくなる。わが砲門は上陸集団に対しても一向に火を吐かない。弾薬の温存と陣地の曝露を避けた為であつたらしい。当初から持久戦の態勢で水際決戦ではなかつたのである。制海制空権を握られては全く手が出ないわけである。

敵は絶大量の偉力をまざまざと見せて、易々と嘉手納飛行場一帯を占拠した。

四月三日、わが軍の前進陣地である宜野湾の線に敵が殺到してきた。我が第二十四師団主陣地と相對峙したのである。

負傷兵が続々と前線から下つてゆく。お互に助け合いながら手の切れた者、足の無い者……筆舌に尽せない醜態である。四月八日戦艦大和以下約十隻が沖縄に向け南下途中轟沈されたと聞かされる。

四月十二日、敵の主力陣地に対し一斉に夜襲を執行。中頭支隊長嘉屋少佐の率いる部隊は敵陣深く潜入し、敵後方で神出鬼没の戦斗をした。この頃第二十四師団正面は彼我入乱れてサンドウィッチ戦を演じ、為に敵の進行も遅々たるものがあつた。

敵上陸後約一ヶ月にして敵は首里北方の上原の線に姿を現した。僅か一ヶ師団で数倍する敵を相手に苦闘した第二十四師団及混成旅団の戦斗は絶頂に備し、